

「うちが覚えとるんはな……イク前になると、ちよつと声が掠れてくんのよ。あと、奥突くときちよつと笑うんよな。あれめっちゃよかった。で、“ここ”喉ぼとけのこの下、キスしたら、急に腰が浮いてきてなあ、もつと舐めてって言われたこと、あるんよ？」
レイナの指が、ずっと自分の鎖骨下をなぞる。

「それで、うちが舌でそこ、こう……ねちよねちよってやってたらな、“お前、それ……やばい、出る”って……ふふつ、懐かし」

サナは何も言わない。

ただ、ペンの先が、紙の上をわずかにトントンと叩いていた。

「今は違う女にしとるんかなあ。けど、うちは忘れへんねん。あの人のいく前の顔、いっちゃん、かつこえかったから」

「……そう、なんですね」

サナが、ぽつりと呟いた。口調は崩れていない。

けれど、その声はわずかに、乾いていた。

——その夜。

久しぶりに、サナは一郎の家に行けることになった。

レイナのマネージメントを兼任しているので、自然と会える回数は減っていた。

「会いたかった」

一郎は、玄関でサナを抱きしめた。

その腕の中が信じられないくらいあたたかくて、心がじわつと緩んでいく。

——ベッドの上で、静かに繋がる。

肌と肌が、ぬくもりで語り合うように重なる。

「最近、忙しかったです……」

「俺も。……てか、お前最近、全然寝れてなくね？」

「ううん。大丈夫です」

その言葉は嘘だった。眠れてない。笑顔も、作り笑いばかり。

サナは一郎の肩に頬を寄せたまま、ぽつりと訊いた。

「レイナさんと……昔、そういう関係だったんですか？」

一郎の指先が、ぴたりと止まった。

「……ちよつとだけな。でも恋愛とかじゃない。あつちは海外行くつて、なんか、自然消滅」

「……そうなんですネ」

「お前、気にしてんの？」

「……一回目……間違って抱かれたし……」

「それは……ほんとに悪かったって……」

サナはかすかに鼻をすすった。

「レイナさんに言われたんです」

「何て？」

「“一郎くんって奥突くときちょっと笑うんよな”って」

一郎が目を見開いた。

「……ごめんなさい。でも、もう気にしません」

「嘘つけ。今の“気にしません”は“気になる”の言い方だった」
サナは黙ったまま、一郎の胸に頬を寄せ、彼のモノに触れる。

「ねえ、今度は……私がしても、いいですか……」
一郎が軽く息を飲んだ。

答えを待たずに、跨がる。

体温が、じんわりと下腹に伝わってくる。

「レイナさんと……私、どっちが気持ちいいですか」
一郎の上で、サナは腰をくねらせながら問いかけた。
太ももに汗がにじみ、胸の先端が震えていた。

目には涙が浮かんでいるのに、声だけは強かった。